

# UIFA JAPON

## NEWSLETTER

### ■主な内容

UIFA第12回日本大会 広報部会からの報告

特集ザ・インタビュー 一財団法人東京都公園協会理事長 石川金治氏-

環境共生にかかわる2つの講演会に参加して

環境共生の視点でロンドンの生活を考える

バンコックにて (1)

中国は今、こんな地球環境共生住宅に着手

ドキュメント5 一第12回UIFA日本大会に向けて- (1997年9月10日~1997年11月01日)

### ■UIFA第12回日本大会 広報部会からの報告

#### 1st. サーキュラへの返信状況について

来年9月の第12回日本大会に向けて、各部会とも準備に追われる年の瀬となりました。初夏の頃、広報部会全員の手作業で1st. サーキュラを発送してから、もう半年がたちました。国内および国外からはすでに170通を越える参加希望が届いています。

内訳を紹介すると、日本国内より約100通、海外から70通です。同伴者を含めた参加希望人数はすでに200名を超えています。また、詳しい資料を送ってくださいとの問い合わせも、ベトナムをはじめとする各国から寄せられており、参加者数はこれからまだまだ増えることが予想されます。

参加を希望する方々の国は多岐にわたり、まさに国際会議の手応えを感じます。希望者が多い国はアメリカ、韓国、そして前回の開催国のハンガリー、デンマークなどです。その他の参加希望国を挙げると、アフリカからは、セネガル、コートジボアール（アイボリーコースト）、チュニジア、モロッコ、南アフリカ共和国、アジアからは中国、マレーシア、インド、パキスタン、モンゴル、カザフスタン、グルジア（どこかわかりますか？）、ヨーロッパからはスウェーデン、イギリス、ドイツ、スイス、イタリア、ベルギー、ルーマニア、ポーランド、バルト海沿岸のラトビア、アドリア海に面したクロアチア、レバノン、南米からは、ブラジル、チリ、プエルトリコ、そして北米のカナダです。世界地図を広げて、国名を確認してみてください。本当に世界中からお客様がいらっしゃるのだと、わくわくしてきます。

会議への参加はもちろんのこと、アブストラクト提出（すなわち発表）や、展示への参加希望も数多く寄せられました。各国から様々なテーマが集まることでしょう。また、国内からは、特に東京圏外（北海道、岩手、福島、岐阜、大阪、兵庫、福岡など）から沢山の参加希望がありました。

次の2nd. サーキュラ発行が待たれるところです。

#### 2nd. サーキュラの予告

本年6月発行の1st. サーキュラに続き、2nd. サーキュラの12月発行に向け、実行委員会各部会の協力のもとに、広報部会の制作担当とP.C.O.の共同作業により編集が鋭意進められています。

2nd. サーキュラは、A5版 4色カラー刷 32頁 仏英日の3ヶ国語を合体したハンディな小冊子となります。

表紙のデザインは、1st. サーキュラの表紙をさらに展開させ、大会のテーマでもある環境共生時代を迎える21世紀への期待と、UIFA活動の発展を象徴するテーマで、UIFAカラーを使った平井美蔓さん(デザイン部会)のデザインによるものです。

2nd. サーキュラは以下の項目より構成されています。

会議日程：日時、行事、会場

ご挨拶：UIFA会長、UIFA JAPON会長・副会長、実行委員長連名

UIFAの歴史：設立目的と活動内容、世界大会の歴史

会議内容：大会テーマ、発表・討議、展示、スタディーツア、市民公開シンポジウム（横浜）の概要

行事内容：本会議（開会式、発表、展示、市民公開シンポジウム、閉会式）、スタディーツア、パーティ、エキスカージョン、ホストコングレス

論文：募集テーマ、アブストラクト作成要綱、発表概要、送付先

展示：募集テーマ、展示スペース、展示登録、送付先

会議参加登録・宿泊・ツア申込み：

登録と参加登録票、参加登録に含まれる項目、宿泊料金、エキスカージョン、ホストコングレス、予約金・申込み手続き

実行委員会構成メンバー・後援、協力団体名簿

その他：アクセス等

折込票：論文概要用紙、展示応募用紙、本大会参加登録用紙

UIFA第12回日本大会の2nd. サーキュラ発行と共に日本大会開催の準備作業も一段と本格化します。多くの参加者を期待するところです。

■特集ザ・インタビュー 一財団法人東京都公園協合理事長 石川金治氏一

来年開催のUIFA第12回日本大会を支援して下さる、恩人ともいふべき方々にお話しを伺うインタビュー・シリーズの第2回は、東京都公園協会の石川金治理事長です。今回のインタビュアーは小川信子副会長他4名（渡辺、石川、田中、今村）が同席し、青山の協会を訪ねてのインタビュー。公園協会からは、総務部広報担当の荒井恵子さんも、加わっていただきました。



小川：いつもUIFAをご支援いただいて、ありがとうございます。

まず、UIFA国際会議が女性の会議をいうことで、女性が考えなければならない問題があるのではないかと思います。石川理事長からご覧になるとどうなのかお伺いしたいのですが。

石川：民間のことはよく分かりませんが、都庁はもともと制度上男女差はないのです。けれど、いわゆる「見えない天井」というものがあつたのは事実です。最近、天井は高くなってきているという気がしますね。たとえば、僕が初めて管理職になったのは八丈島ですが、一つの課がミニ建設局のような組織で、あらゆることを全部処理していました。そこに非常に優秀な女性がいたんですが、暗黙の掟というのでしょうか、女性は出張できない慣行があり、都庁での打ち合わせができないのです。当時は男女がペアで出張するのは、風紀が乱れる基ということだった。その後、担当者は男女に関わらず出張するという、新しいルールになりました。担当で無い人が出張しても無駄でしょう。性別の問題ではありません。

小川：いつ頃のお話ですか。

石川：昭和45、6年のことです。当時は、いいところは男性がとるといふ発想もあつたのではないかな。

小川：男性管理職の中には、今だに理解のない方もおいでですか。

石川：最近の話ですが、東京都では用地担当が用地事務に何年従事したかを行政専門職への推薦の持ち点にする制度がありますが、女性が用地買取に行くと地元から「何で女子供をよこすのだ」というのがあって、従事させなかったのです。それで持ち点が少なくなるのはおかしいですね。今では折衝部署にも女性を配置するようになって、活躍しています。

小川：今働く女性達は、困難がある一方、理解していただけるような動きができて、制度としての保障をうまく活用しながら伸びていく環境になってきたと思いますけれど、UIFA日本大会の開催に何を期待なさいますか。

石川：アドボケーターの役割、つまり“政策提言”をできるような形になって欲しいですね。今話題になっている京都の環境会議のように、京都が決まったのだからそれを受けて、次はこういう政策を作ろうという、動きが出てきますでしょう。そんな提唱がUIFAでできれば素晴らしいと思っています。赤松先生のお話に、就職しても辞

めて行く人が多いというのがありました。いわゆるM字カーブですね。そこには保育の問題や通勤距離の問題があります。建築家の人達がこれらを直していかなければならないと思います。日本の国が成立していくには女性がフルに働ける様にしなければならない。赤松先生が、働く女性は仕事の魅力と日常生活の大変さとのバランスが崩れて辞めていくと云われましたが、なんとかして苦勞を減らすことを考えなければいけない。保育の問題でいえば、駅の近くに保育所があるといい。都市計画的に考えるのも一つの方法です。保育所を民間だけでやろうとすると、駅前のいい土地では採算が合わない。駐車場も同じで、単独の経営ではコストの面で難しいから付置義務をつけている訳です。国民が生活をしやすいよう、女性の活力を引き出すような都市計画があつてもおかしくないと思います。

小川：保育園は今、公立施設よりも社会福祉法人が多いのですね。

石川：今、行政が行う保育園は福祉政策の側面が大きい。そうではなく、活力を維持するための、あるいはより楽しい生涯を送る視点からの政策があつてもいいですね。

小川：女性に働いてほしくない社会なのではないかと疑いたくなりますが、現実はどうなのでしょう。

石川：労働人口が減り高齢者が増えるので、これからは働く女性が増えるように考えなければならない時代ですよ。通勤距離が長くて困るのであれば在宅で仕事ができるようなシステムを考えるのも建築の分野の仕事ですね。どういふインフラを整備するかという。

小川：育児しながらの在宅勤務は条件づくりをしないと両立が大変です。預けられて、在宅ならよいのですけれど。日本は基本的に在宅で働くことに対して補償してくれない社会だと思います。

石川：行政がやっている保育所はフルタイムで働く人を対象にしているから、在宅で仕事をする人に厳しくなってしまうのですね。

小川：今後、女性の在宅労働者はインターネットなどを通じて知的労働として増えていこうし、また社会もそれを必要としている。そのときに社会サービスが不十分な対応だと困ると思うのです。

石川：そういう話は、男性が考えていたら気がつかない事が多いですよ。女性がどんどん提唱していかないと。

小川：世界会議などの世界的なレベルでの提言が重要だと思います。

石川：もう一つ赤松先生のインタビューで気が付いたのは、女性が一度公務員をやめたら戻れませんよというところ。あれも男性中心の考え方ですね。子育ての間だけやめて、またもう一度試験を受けて入って仕事ができる制度を作らないから、2度と動められなくなっている。今の制度はおかしいから直そうということになれば、規程をちょっと追加するだけでできるはずですね。今の日本の賃金体系は家族給になっているけれど、仕事に見合った給料ということになれば、追い付けばもとの給料に戻るわけですから。そこを変えていかないといけないし、いずれ変わっていくと思いますよ。

小川：一般的に育児休暇がとれるようになれば、ずいぶん楽になるでしょう。話は変わりますが、東京都の緑化についてご専門の立場からお聞かせいただけませんか。

石川：公園の多い地域というのは周辺にも緑が多いんです。千代田

区のように皇居という昔からの遺産があるところは別ですが、文京区や豊島区という都心区は緑を増やすのが大変です。ぼくが今、皆さんに期待したいのは屋上緑化です。例えば、聖路加病院の屋上は、公園協会で助成して緑を造った場所です。病室から緑が見えるし、リハビリにも使えます。一般の方も入れるようになっています。屋上に緑がある建物を設計していただければ、緑が増えるわけですね。

小川：東京都公園協会では既存の建物も支援なさるのですか？

石川：助成の対象は、都民に開放してもらうのが条件です。だからマンション等は難しいと思います。

小川：緑の無いところでもあきらめないでということですね。

石川：空からみると、屋上が乱雑なんです。空調機械が置いてあったり、実に勿体ない使い方をしている。

小川：屋上緑化は、高さでいうとどのくらいまで可能ですか？

石川：超高層は無理かと思うが、30m位までなら大丈夫でしょう。

小川：こういう緑化の問題に女性の力は有効でしょうか？

石川：そうですね。女性がこんな住宅に住みたいと言い出せば、一般化してくるでしょう。

小川：女性の技術者がどう発言していくかが重要ですね。

石川：そういうことです。女性の目でとらえた暮らし易さや良好な環境等をいかに都民に伝えるかです。UIFAのような会議がきっかけになって、マスコミが取り上げ次第に広がっていくといいですね。大事なのは同じことをずっと続けることです。一回であきらめず。ぼくは河川部が長かったんですが、「隅田川に緩傾斜堤防を造ろう」と常に言ってきた。担当の時に計画をまとめ、その後も河川部の後輩に、あれどうなったと言い続けていると、後輩もほっておかず、事業や考えがずっと続いていく。当時は美濃部都政の終わりの頃で、今と同様全くお金が無い時代で、企画調整や財務の担当は新規事業には冷たかった。そこで、まず区長さんに話をもっていきました。台東区と墨田区の区長が乗ってくれ、当時の環境庁政務次官が女性でしたが、女性は感性が良いですね、「これは楽しい」と言ってくれ、台東区長がその気になった。桜橋前後50m位、今芝生が張ってありますが、あれは両区がやったんです。一度できれば、皆が「あれはいいね」と言ってくれるんです。その後は大川端の再開発で、都で緑を造るから河沿いを空き地として20mほど開けるようにいいました。同じことをいい続けていけば、そのうち皆が協力してくれるようになります。いい続ける事なんです。

小川：私もいい続けて50年、保育所にしても相対的には良くなっていますね。ところで、現在の東京は緑が大分多くなったように思いますが、次の段階はディテールをどうするかではないでしょうか。

石川：公園は、日比谷公園のように都市を訪れた人の為の公園と、地域に密着した公園がありますね。地域型の公園は、地域の人達が自分で管理するのがいいのではないかと思います。日比谷公園の様な所は、チューリップの時期には一面にわっと咲いているのが景観として見事だから、専門家がやればいけれど、地域の公園は色々な花が混じって楽しさや味わいがあるのだから、地域の方が好きなようにやられたらいいと思います。今は公園デビューで、よちよち

歩きの子供連れと老人に二極化しています。利用者が限られていることが、公園に予算がつかない大きな原因だと思っています。これは一つは塾通いが原因で、子供が遊ばなくなったことでしょうか。もう一つは公園でない感じがあるのではないのでしょうか。

小川：公園の造り方にも問題があるのではないですか。

石川：どこへ行っても砂場、ブランコ、滑り台の3種の神器。都心の子供のいない地域にも児童公園という名前で公園があるわけ。歩道からずっと入れないように樹木で囲ってあるんです。子供が安心して遊べるようにという配慮だったのですが、今となっては大人が入りにくいのです。近くのオフィスの人が公園で弁当を食べに来やすいように、歩道との境をなくせばいいのですが。

小川：人々の暮らしの変化に対応するのが難しいのでしょうか。

石川：法律が縦割りでできているものですから、その辺の考え方を変えないと。日比谷公園は歩道と一部の公園用地を一体的な形にしました。すると、転んだ時はどちらの部署の責任になるかということもありました。ぼくは道路の管理の部署にいたから、どこで転んでも歩道とということと考えるとやったのです。都民から見ればどこも東京都が管理しているわけですから。

小川：今度の会議のテーマが環境共生ですが、それに関連してどのような東京を考えていらっしゃいますか？

石川：屋上緑化や壁面も含めた立体的な緑化を考えていくことです。ヒートアイランド現象も緑によって減少するはずですし。これは建築家の皆さんの頭の切り替えだけでできるし、そんなに施工費が増えるわけではないですから。

小川：一人一人が住む町を管理するという点はどうでしょう。

石川：東京の場合、都心にも人が住むようにしないと。雪が降るとビルの前の道路は雪かきする人がいないから残ってしまいます。事務所だけというのがいけない。都市計画の問題ですね。また、どういう用途で使っても同じという税制にも問題があります。“住みよい町にするには”ということを多方面から考えていかないと。

小川：今日は、国際会議の参考になるご意見を、沢山提案していただきました。最後にUIFA国際会議の時に、都や公園協会の仕事から、これはぜひ見て欲しいという所を教えていただけますか。

石川：最近公園協会で「庭園花めぐり」という冊子を出しました。京都市まで行かなくても、日本庭園が見られるよう都内の庭園を集めてあり、お別れパーティー会場の清澄庭園も含まれていますよ。

小川：お別れパーティーでは、大正記念館と茶室を使わせていただく予定ですので、是非おでかけ下さい。今日は長時間にわたりお話を聞かせて頂きまして、ありがとうございます。

(記録・写真担当：田中、今村)

石川金治：

財団法人東京都公園協会理事長： 建設局長、東京都技監を経て現職。UIFA第12回日本大会については、協会の協賛はもとより東京都からの後援を頂くにあたってご尽力を頂いた。

小川信子：

UIFA JAPON副会長。日本女子大学住居学科教授。建築家。

■環境共生にかかわる2つの講演会に参加して

寺尾信子

UIFA国際女性建築家会議第12回日本大会に向けての勉強の一環として、次のA、B2つの催しに参加して参りましたので概略をご報告します。



■環境共生の視点でロンドンの生活を考える

中村 陽子

ロンドンの生活で一番印象に残ったのは、水の違いが生活に大きく影響しているのではないかとことごとくでした。イギリスの紅茶のおいしさはその水が作りだしたものであると言われます。また、食事はまずいのですが、生の野菜や果物は味も良く、傷み方も遅く日持ちがします。イギリスの水は紅茶と食物に適しているのでしょうか。イギリスの庭園の写真には冬でも青々とした芝生の情景が良く紹介されていますが、青々とした芝生に雪の積もる様子は、日本人の私には馴染みの無いものだけにとても印象的でした。芝生の種類が違うのは勿論でしょうが、その種が育つ土や、土を作る水の違いも大きいのではないかとその景色を見ながら思いました。私は環境という言葉が示すものが、ロンドンで暮らす人々と東京で暮らす人々とは大きな隔たりがあるのではないかと思います。



日本の建築は「徒然草」に代表されるように『夏を旨』とした、自然をどう取り入れ、自然の何を選んで建物の中に取り入れるか、自然との共存共生が可能であるとの前提から始めているように思います。私の数少ない体験の中でヨーロッパの建築を代表するものは、高い城壁に囲まれた都市であったり、石や煉瓦作りの建造物であって、まさにシェルターとしての建築を思います。もしロンドンの建造物が初めの用途での使われ方がされなくなったとしても、建物そのものの存在で環境の中に屹立し続けるのが建物の姿であるようです。

今回のUIFA国際会議のテーマ「環境共生時代…」が「… of Harmony with the Environment」と訳されたのは、なんと日本の環境との共存の姿勢を表しているのではないかと感じています。

環境という言葉は Environment と置き換えられるでしょう。でも共生という言葉はその環境をどう捉えるかで英語での表現も変わるのではないかと思います。

ロンドンのAAスクールで私は“Environment”が付く二つのコースに参加しました。一つは“Environment Access”ですが、ここではバリアフリーデザインについて学びました。もう一つは、私が専攻していた“Housing & Urbanism”コースが一学期間に合同の授業を行ったのが“Environment Enagy”コースです。このコースの学生とともに“Sustainable”をテーマにワークショップを行いました。

JIAが1995年に創刊したサステナブルデザイン・ガイドの巻頭の文の中で林昭男氏は『(前略)直訳すれば、「持続性のあるデザイン」となります。それは、単なる省エネ・省資源を超えたあらゆるものが共生し得る未来のための考え方です。(後略)』と書いています。これも一つの環境共生の考えを示す言葉であると思います。ロンドンで使われる“Sustainable”という言葉はその意味を含んで使われていました。「持続するもの」を堅牢な建築物として作る国と、20年毎の伊勢神宮の遷宮のシステムの中に見い出そうとする国、Harmony と Sustainableとの共生を捜すことができれば、などと考えています。

|         | A  | B   |
|---------|--|---|
| 講演会タイトル | サステナビリティへの統合<br>＜21世紀のヴィジョンとエコロジカル・デザイン＞…シム・ヴァンダーリン来日記念講演  | 地球学サステナブルデザイン<br>＜サステナブルデザインの可能性を求めて＞…JIA設立10周年記念大会プロフェッショナルワークショップ |
| 日時(場所)  | 97. 6. 19(東京YKK・両国ホール)   | 97. 9. 23(国際東京フォーラム)  |
| 講師      | シム・ヴァンダーリン※<br>(司会)林 昭男  | 石井和純・芹沢高志・林昭男・<br>川村健一(司会)加藤義夫                                      |
| 備考      | ※カフォルニア大学名誉教授、エコロジカル・デザイン・インスティテュート主宰。1961～94年まで33年間UCバークレー校の環境デザイン学部でエコロジカル・デザインのプログラムを創出し、エコロジカル・アーキテクチャの世界的開拓者のひとりとして、1970年代にカフォルニア州政府付建築家に任命される。同州がエネルギー効率の優れた都市政策の世界的リーダーとなった過程で大きく貢献。現在主宰している研究所は、デザイン・リサーチ・サステナビリティの教育を統合した、多岐にわたる専門家グループの共働組織として注目されている。「エコロジカル・デザイン」著者、理論家であり実践家でもある。 |   |
| 参考図書    | 「エコロジカル・デザイン」日本語訳<br>著者:林昭男/発行所:ピオシティ  | サステナブルデザインガイド(日本人建築家協会編)  |

Aに参加して：UIFAの会員富士川素子さんからの誘いで参加。定員200名でしたが、最近のこの種の講演会では記憶にないほど超満員で、参加者の熱気が感じられました。

30数年前から環境問題に正面から取り組んでいるシム氏の情熱と温かい人柄が伝わってきました。エコロジカル・デザイン第一世代(70年代)：ソーラシステムの最適化など→第2世代(90年代)：敷地、資源、素材、コミュニティなどを、エコロジーに根ざした相対的な場所として総合化。→(第3世代)：「エコロジカル・デザイン」の原則に則した新しい経済学エンバイロノミックスへ。

持続可能な未来を作るのに必要な「道具」を子供たちに伝達すべく、エコロジカルな環境教育プログラムの開発へ。内容に興味を持たれた方は上記の本をお読み下さい。

Bに参加して：JIAの中でもサステナブルデザインについて語れる4人の講師と司会者による、様々な観点からの興味深い話でした。石井氏の環境への視点を盛り込んだ作品の説明、生態学的地域計画という発想を基盤にした地域計画家芹沢氏、アメリカ在住の国際コーディネーター川村氏のそれぞれの話があり、サステナビリティについての素養と一般常識を深めるという主催者のねらい通り、今後知識を深める上での貴重な足がかりになりました。

註)「サステナブル sustainable」：持続可能な。環境を破壊せずに維持できること。アメリカを中心に1970年代から地球資源の問題、エネルギーの問題、環境の問題に絡んで使われるようになり、1987年にサステナブルディベロップメントとして公になった。

## ■バンコックにて (1)

柏原 雪子



タイには3つの気候しかない。「ホット」「ホックター」「ホットテスト」だ、というのは良く耳にするジョークですが、バンコックに来て半年、季節が変わると朝夕肌寒く感じるようになるから不思議なものです。とは言え、日本から来た人達は“暑い”と言っていますから、こちらが環境に順応したということなのでしょう。確かに毛穴が開いてしまったような気がします。

さて、バンコックに来て印象的だと思うものを列挙しますと、道路、食事、女性、建築……と云ったところでしょうか。

これから数回にわたってバンコックを紹介したいと思います。

### (1) バンコックの道路事情

「渋滞」の一言に尽きます。とにかく車が多過ぎます。鉄道網が未整備なので車は生活必需品なのです。朝には郊外の人々が一斉にバンコックに流れ込みます。夕方には逆の事態が起きます。朝の7時前後はたった2キロに1時間というのは当たり前です。うちの同居人が毎朝6時半に家を出るのも仕事が好きな為ではないのです。

たくさん車の間を縫うようにバイクが駆け回ります。これが非常に危ない。歩道を走り、道路を迷走して楽しませて(?)くれます。バイクの半分位はタクシーで、急ぐ場合の確実な移動手段です。危険を顧みなければ乗るのも一興ですが、試す度胸はありません。

この状況下では、道路の横断も命懸けです。日本では車がないい時を見計らって渡るのが普通ですが、こちらでは危険です。どこからともなく車かバイクが現れて目の前を猛スピードで駆け抜けていきます。正しい渡り方は次の通りです。

「車がたくさん走ってくるのを待つ→もう少し待つともっと車が増える→さらに待つと車が道路に溢れて動けなくなる」

この時が横断のチャンスです。注意するのはバイクだけで済みますが、それでも充分危険ではあります。

車の方が大変なら道路の方も変わっています。例えば右折。一旦行き過ぎてUターンしてから左折します。大きな道路には何箇所もUターン専用レーンが設けられています。ある地点から他の地点へ移動するのに一通りしかルートがないことしばしばです。信号も一度赤になると7~8分は青になりません。また道路が川にぶつかった所で突然なくなったりもします。ある斜線が時間帯によって通行の向きが変わったりするのはグッドアイデアではありますが、よく知った人でないと事故の原因になり兼ねません。

これらの交通上の問題は全てバンコックの道路の大半が運河を埋め立てて(運河の上に)作られていることによると思われます。つまりバンコックの道路は水上交通のネットワークを継承しているだけなのです。バンコックの交通渋滞を解消するためには、陸上交通を考慮した道路計画が必要ですが、抜本的な対策は講じられていないようです。土地なら充分にある(バンコックからは山が見えませんが)ので例えば還都なども考える必要があるのではないのでしょうか。

## ■中国は今、こんな地球環境共生住宅に着手

吉田 あこ



1997年9月、私共は北京経由で、憧れの唐の首都だった西安の美しい城郭に入った。軒下の雀までが、その昔の日本からの遣唐使も聞いたと同じ鳴き声なのかと思うとなんと深い興奮が湧く。こうして、西安建築科技大学の迎賓館に入る。

### 環境共生住居：

私どもの用向きは中国国家自然科学基金会による研究「黄土高原緑色住区模式研究」(主査、劉加平教授)への協力研究である。これは、つまり、毛沢東の出身地にあたる延安の丘陵地帯に広がる横穴式住居地区(ヤオトン)が省エネで、冬暖かく、夏涼しい地球保全型の点に着目し、この特性を生かしつつ、さらに活性化し、丘陵全体で太陽熱放射によるソーラーとの合体住区とし、一方、雨水・湧水を取り入れ生活排水の浄化水と共にリサイクルさせる地域全体の装置化で緑化までも計る大構想である。さらに、ヤオトン内部の装飾や家具は都会風に、家事設備も近代的に考案して、地方と都会の住環境の格差をなくしながらも、都会にない地方の持つ省エネ、省資源という良さを取り込もうという本格的な計画である。

こうした対象になるヤオトンの住居はなんと黄河の中流域、陝西・山西・寧夏・甘肅の4省にわたって約7,000万人の内、約5,000万人がこのヤオトンに住んでいるとのこと。実に、中国70%の住居を地球に優しい住まいに変換するという壮大な先導的モデル計画である。

ところで、この計画案のトップは大学院生で、しかも女子学生の作品であった。なかなか有望なので、UIFA'98で発表して頂きたく熱い眼差しを送ったおいた。

### 中国の少子高齢策：

中国は15年前から都市域内の人口増の調整の必要から「ひとりっ子政策」をとったが、この策を進める前に手厚い高齢期の保障策を打ち出し合意を求めた。元来、中国では子供を沢山持つことは老後の安泰につながるとして、日常も子育て中心、血縁優先が強い。

そこで、晩年の佻しい独り暮らし老人のイメージを払拭しながらの厳しいひとりっ子長期政策を進めている。私は滞在第一日、早朝の音楽に目を覚まし窓を開くと、登校するはつらつとした子供達と、音楽に合わせて、いつまでも現役を狙って屋外での太極拳に励む中高年層の力強い姿があった。

現在は、ひとりっ子政策は軌道に乗った。高齢化はまだの状態では若い学生は高齢者のイメージを余り持ち合わせない。そこで、私は要望を受けて、日本における高齢者施設の住宅化について講演をし、リロケーション上の問題、アイデンティティの継続、痴呆症の予防を建築計画上から、自分の設計事例をスライドで話した。講演時、私が高齢者の動作をする度にクスクスと若い笑いが漏れ、眼は輝いた。そして、翌日から、中国の高齢者住宅への提案なゼミが開かれた。私は、率直で、行動的な学生たちに後ろ髪引かれる思いで、帰国の途に着いた。

(実践女子大学教授)

# Union Internationale des Femmes Architectes Japon

## UIFA JAPON 事務局

〒102 東京都千代田区麹町2-6-5  
麹町E・C・Kビル 株式会社生活構造研究所内  
TEL03-5275-7861 FAX03-5275-7866

### ■ドキュメント5 -第12回UIFA日本大会に向けて-

(1997年9月10日~1997年11月01日)

9月10日 第1回P.C.O.と実行委員会部会代表打合せ。

9月17日 国際観光振興会の協力内定。

9月23日(10時~13時)第8回実行委員会、カムライナリ7館。23名。

**総務部会** 後援等依頼先及び協賛依頼先リスト作成。**プログラム部会** 第7回(9/11)第3回ワークショップの見学コース検証結果を踏まえ検討。発表・展示に関する募集要項、申込みフォーマット、大会詳細プログラム等内容・書式の検討。**おもてなし部会** (9/11)記念品調査。(9/13)英会話レッスンについて打合せ。(9/14)スタディツアーコース、ポストコングレスツアの検討、部会方針のまとめ。(9/16)第1回P.C.O.との打合せ。(9/17)記念品資料(案)作成。

**広報部会** 第11回(8/23)チラシ細部検討と配付先検討。(8/25)印刷入稿。(8/28)色稿校正。(9/7)チラシ印刷完成。(9/23)第8回実行委員会へデザイン委員会の設置について提案提出、承認される。

9月27日 10/1開始の英会話レッスンのお知らせ発送(事務局)。

9月30日 日本万国博覧会協会助成申請。

10月01日 展示会パネル制作について乃村工芸との打合せ。

10月02日 作品展示について打合せ。生活構造研究所にて。

10月08日 第8回実行委で承認されたデザイン担当部会発足。  
部会長 平井 コアチーム 北本、大高。

10月09日 兵庫県より後援名義使用許可。

10月15日 日本建築学会より後援名義使用許可。

10月21日 第2回連絡調整会議(2nd.サーキュラ作成に向けて)。

11月01日(1時~3時)第9回実行委員会、カムライナリ7館。21名。

**プログラム部会** 第8回(10/19)2nd.サーキュラの担当箇所チェック、今後の作業スケジュールの検討。**おもてなし部会** (10/15)プログラム部会合同 清澄庭園見学会及び打合せ。**広報部会**(10/6)2nd.サーキュラ 初校、及び制作スケジュールについての打合せ。(10/29)2nd.サーキュラ 第2校の打合せ。**デザイン部会** 第1回(10/8)デザイン体制に関する検討。(10/15)コアチーム+α(広報担当)の会合。

### ■役員会の報告

第6回役員会(97年9月18日6時30分~)役員9名出席。

第7回役員会(97年10月21日6時30分~)役員10名出席。

### ■英会話レッスンの近況について

正宗 量子

若くて優しく、しかもキビキビとレッスンを進めるキャサリン・フィンドレイ先生。三田の龍生院寺の境内にある古い古びた日本家屋2階が会場で、これまでに3回のレッスンがもたれました。

中原会長を中心に会員16名、和気藹々にスタートとしたことをご報告します。初級Aクラスでは、UIFA日本大会に即戦力となる、挨拶や紹介、地図を見ながらの道案内、買い物などに必要な会話など。お互いにパートナーを組み、絵を見ながら質疑応答し合う会話には笑顔が絶えません。コーヒープレイクタイムの後、更にBクラスでは、Tokyoという小ガイドブックから抜粋した近代建築の文章を読み、単語はまるで英々辞典を引くような先生による英語の説明があった後で内容を把握し、それについて英会話を進めるという、やや高度なレッスン方法で進められています。最初は、Ushida-FindlayのTruss Wall House、現在は、長谷川逸子のShonandai Culture Centreを読んでいるところ。A,Bクラスを続けている人が2/3でまあまあの出席率。空きがあるので奮ってご参加下さい。

### ■東京助成財団 第4回自主活動 自主研究会助成報告会

東京女性助成財団の助成による1996年度の自主活動・自主研究の報告会が12月6日(土)ウィメンズプラザで行われました。

UIFA JAPONは昨年度に続き「すまいをめぐる女性-女性建築家の戦後史を辿りながら-」の研究に対し助成を受け、この程発行されたこの冊子も展示されます。当日は4つの全体報告、3つの分野別報告を初め各グループの作成した作品の展示、参加者の交流会も併せて行われました。

・日時 12月6日(土) 13:15~17:45

・会場 東京ウィメンズプラザ 2F 渋谷区神宮前5-53-67

### ■UIFA第12回日本大会実行委員会へのお誘い

実行委員会は、2nd.サーキュラの発行を目前に佳境に入っています。いよいよ残り9ヶ月、あっという間に開催日になりそうです。プログラムやおもてなしの工夫あるいは支援への呼びかけ、またジャーナリズムへの働きかけなどまだまだやらねばならないことが一杯あります。第10回実行委員会は12月20日(土)PM2時から赤坂見附「オカムラ」です。皆さんの参加をお待ちしています。

### ■広報日より

Newsletterの編集委員を募集しています。

UIFA JAPONの活動を伝える Newsletter は年6回発行、本号で26号となりました。来年のUIFA日本大会開催というUIFA JAPONの大きな飛躍の時を迎え、Newsletterの紙面もさらに充実させると共に新しい展開を図るべく、新たな編集委員を求めています。貴女の新鮮なアイデアとパワーをもってNewsletterの編集にご参画下さい。お申出は事務局又は下記担当委員までご連絡下さい。

担当：飯島、川嶋、渡辺、田中、大高、(柏原)